

畜産農家の皆さんへ

【配合飼料が値上げになります】

【トン当たり各畜種平均

1,300 円値上げ】

適用変更期間：平成 25 年 7 月～9 月期

《原料の動き》

主な値上げ要因：為替の円安により、値上げとなる。

※詳しい内容は窓口にお問い合わせ下さい※

平成25年7～9月期 価格改定資料

平成25年7～9月期の配合飼料供給価格改定について

1. 供給価格：全国全畜種総平均トン当たり約1,300円値上げすることとし、畜種別・銘柄別に別途決定する。
2. 対象銘柄：配合飼料全銘柄（代用乳・混合飼料・養魚用飼料は除く）とする。
3. 適用期間：平成25年7月1日以降9月30日までの出荷分とする。なお、期中において、原料・外国為替情勢などに著しい変動があった場合には、別途措置するものとする。

4. 情 勢

(1) 飼料穀物

とうもろこしのシカゴ定期は、3月には700セント/ブッシェルを超える水準で推移していたが、3月29日に米国農務省が発表した全米穀物在庫報告において、とうもろこしの旧穀の在庫数量が予想よりも増加したことを受けて620セント/ブッシェル台まで下落した。その後、米国産地での降雨が続き、新穀の作付進捗が大幅に遅れたこと等から上昇し、現在は660セント/ブッシェル前後で推移している。

今後とうもろこしのシカゴ定期は、作柄に大きな影響を与える夏場の受粉期にむけて天候に大きく左右されるものと見込まれる。

(2) 大豆粕

大豆粕のシカゴ定期は、3月には460ドル/トン台で推移していたが、南米産の新穀大豆の輸出が増加し、一時430ドル/トン台まで下落した。しかし、大豆粕は東南アジア諸国の食肉消費の拡大など構造的に需要が高まっており、現在は500ドル/トン前後の水準となっている。

国内大豆粕価格は、シカゴ定期の上昇と円安の影響により大幅な値上がりが見込まれる。

(3) 海上運賃

米国ガルフ・日本間のパナマックス型海上運賃は、3月には南米産の穀物輸出が最盛期をむかえたことから45ドル/トンを超える水準で推移していたが、南米産の穀物輸送が一段落するにつれて船腹需給が緩和し、現在は43ドル/トン前後で推移し

ている。

今後は、引き続き新造船の竣工もあるため、軟調に推移するものと見込まれる。

(4) 外国為替

外国為替は、3月上旬には1ドル93円台で推移していたが、4月4日開催の日銀金融政策決定会合で長期国債買入額の拡大等の量的・質的金融緩和策が発表されたことから円安がすすみ、一時100円を超える水準となった。現在は急速な円安に対する警戒感から調整局面となり、98円台となっている。

今後は、日銀による金融緩和政策の継続に加えて、米国の景気回復も見通されるため、円安で推移するものと見込まれる。

為替の円安に対して、シカゴ定期が下落しているため穀類価格に大きな変動はないが、大豆粕等の価格が大幅に値上がりすることから、平成25年7～9月期の配合飼料価格は前期に比べ値上げとなる。

H25_07-09月期 基金補てん額の算出基礎

年度	価格改定		基金補てん金				配合飼料 価格 1 価格 2	配合飼料 増額	実質負担 増率
	全農	3基金平均	基本部分	4%超部分	特例措置	合計			
平成20年4-6月	4,500	4,660	7,900	2,600		10,500	49,796	1,960	104.1%
平成21年7-9月	2,800	2,892	0	0		0	51,688	2,892	105.9%
平成21年10-12月	-1,400	-1,362	0	0		0	50,326	-1,362	97.4%
平成22年1-3月	-500	-432	0	0		0	49,894	-432	99.1%
平成22年4-6月	-1,000	-685	0	0		0	49,209	-685	98.6%
平成22年7-9月	0	0	0	0		0	49,209	0	100.0%
平成22年10-12月	0	0	0	0		0	49,209	0	100.0%
平成23年1-3月	3,200	3,425	3,250	0		3,250	49,384	175	100.4%
平成23年4-6月	1,800	2,138	4,700	0		4,700	50,072	688	101.4%
平成23年7-9月	1,300	1,398	4,700	0		4,700	51,470	1,398	102.8%
平成23年10-12月	-1,000	-872	2,100	0		2,100	53,152	1,682	103.3%
平成24年1-3月	-2,600	-2,331	0	0		0	52,921	-231	99.6%
平成24年4-6月	900	1,141	0	0		0	54,062	1,141	102.2%
平成24年7-9月	900	983	450	0		450	54,595	533	101.0%
平成24年10-12月	4,350	4,745	5,450	0		5,450	54,340	-255	99.5%
平成25年1-3月	0	0	4,300	0		4,300	55,490	1,150	102.1%
平成25年4-6月	3,200	3,226	5,800	0		5,800	57,216	1,726	103.1%
平成25年7-9月	1,300	1,300	5,800	0		5,800	58,516	1,300	102.3%
							*直前1カ年平均単価 59,409		

注:平成23年10-12月期の飼料月報価格 55,252円(全畜種加重平均:税抜き)

注1. 配合飼料価格1は補てん前の価格

注2. 配合飼料価格2は補てん後の価格でいわゆる生産者負担価格

注3. 配合飼料価格1、2はあくまで試算のための仮定値

注4. 平成19年4月以降の配合飼料価格は税抜きで計算することとなった

注5. 補てん額単価は基本部分と4%超部分の合算を50円刻み(50円未満切捨て)となる。

ここでは計算上、基本部分を50円未満切捨てし、4%部分で調整した。

平成25年4-6月期補てん額算出計算式

1. 基金補てん基本部分

平成25年4-6月改定額	1,300	× 4 / 4	1,300
平成25年1-3月改定額	3,226	× 3 / 4	2,420
平成24年10-12月改定額	0	× 2 / 4	0
平成24年7-9月改定額	4,745	× 1 / 4	1,186
合計			4,906 (A)

2. 補てん合計 (A)=4,900円

配合飼料価格算出基準

	税抜き価格	税込価格
H23 10月	55,285	58,049
H23 11月	55,236	57,998
H23 12月	55,234	57,996
平均	55,252	58,014

農林水産省
「流通飼料価格等実態調査」
配合飼料全畜種加重平均

飼 料 情 勢

1. とうもろこし

(1) 米国農務省需給見通し

12/13年度の供給量は、端境期に向け米国内の現物需給がタイト化する影響で飼料向けの輸入が増加すると見られることから、前回発表から25百万ブッシェル増加する見通し。一方、需要量は、エタノール向けなどの工業・種子用需要が増加したため、前回発表から15百万ブッシェル増加した。この結果、期末在庫は前回発表から10百万ブッシェル増加し、期末在庫率は6.90%となる見通しとなった。

13/14年度の供給量は、作付が遅れる状況で、夏場の高温時期に受粉期があたることから、単収の下落に伴う生産量の減少が加味され、前回対比125百万ブッシェル減少する見通し。一方、需要量は、エタノール向けなどで増加が見込まれるものの、とうもろこし価格の高値推移が飼料需要の減少をもたらすことが加味され、前月対比70百万ブッシェル減となる見通し。13/14年度の期末在庫は前回対比55百万ブッシェル減の1,949百万ブッシェル（在庫率15.17%）が見込まれている。

		とうもろこし				
		11/12	12/13	12/13	13/14	13/14
		6/12	5/10	6/12	5/10	6/12
	作付面積	91.9	97.2	97.2	97.3	97.3
	収穫面積	84.0	87.4	87.4	89.5	89.5
	単収	147.2	123.4	123.4	158.0	156.5
供 給	期首在庫	1,128	989	989	759	769
	生産量	12,360	10,780	10,780	14,140	14,005
	輸入	29	125	150	25	25
	計	13,516	11,894	11,919	14,924	14,799
需 要	国内需要	10,985	10,385	10,450	11,620	11,550
	飼料用	4,545	4,400	4,400	5,325	5,200
	工業・種子	6,439	5,985	6,050	6,295	6,350
	内エタノール用	5,011	4,600	4,650	4,850	4,900
	輸出	1,543	750	700	1,300	1,300
	計	12,527	11,135	11,150	12,920	12,850
	期末在庫	989	759	769	2,004	1,949
	在庫率	7.89	6.82	6.90	15.51	15.17

単位：面積（百万エーカー）数量（百万BU）在庫率（%）単収（ブッシェル/エーカー）

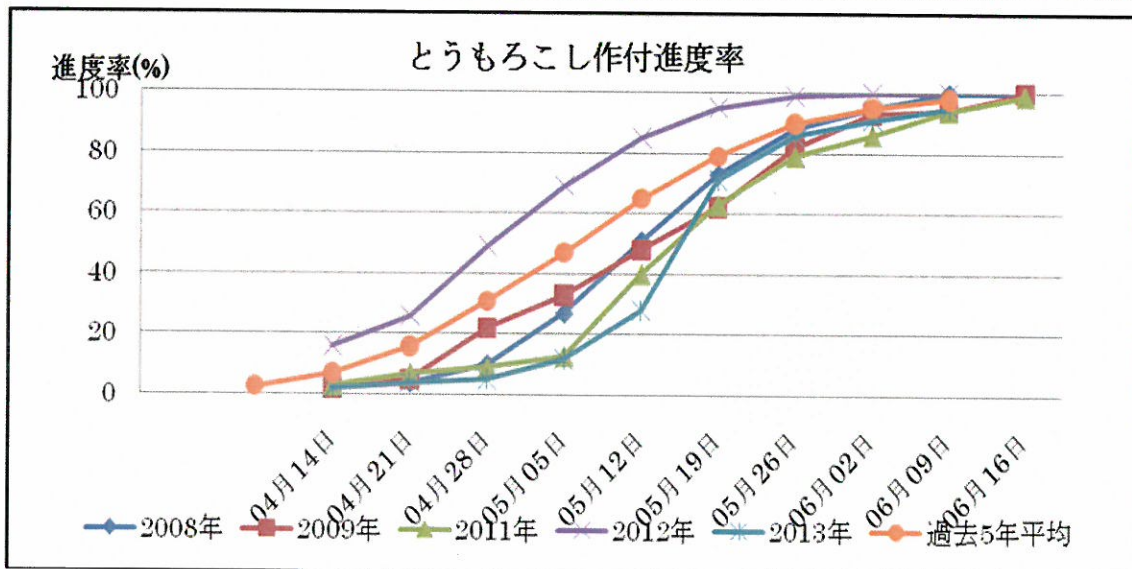
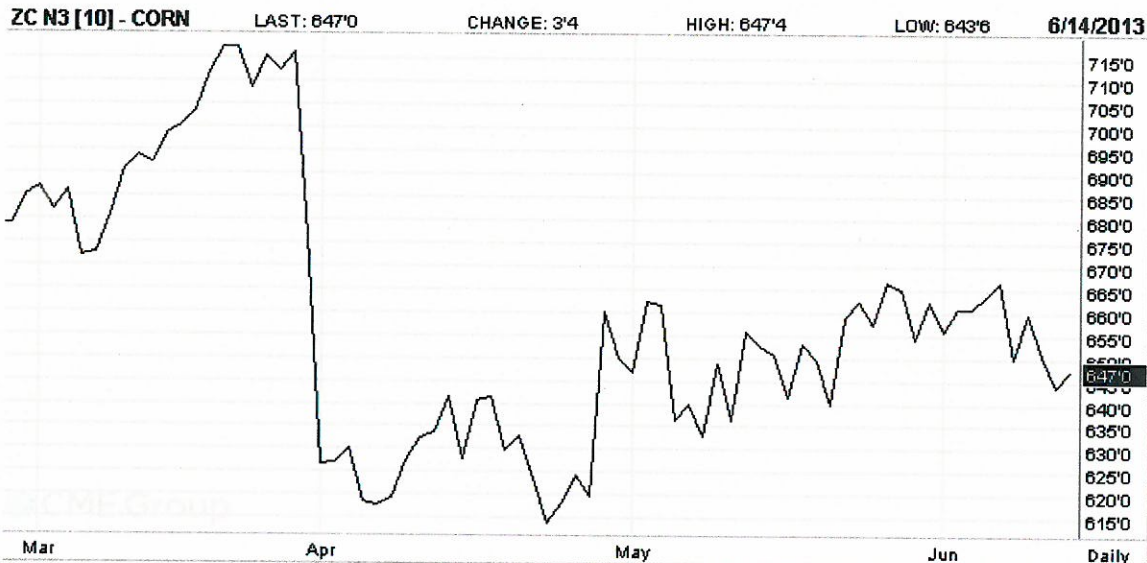
(2) シカゴとうもろこし相場

6月上旬のとうもろこしシカゴ定期は、作付天候に一喜一憂する展開となった。とうもろこしの作付が6月中旬頃まで長引くと、農家は大豆への作付シフトを選択し、結果的に作付面積が減少する公算が高まると見られている。このことから更なる降雨見通しから665セント/ブッシェル付近まで上昇する場面も見られたが、その後天候改善予報により作付が一举に終了すると見られたこともあり、650セント/ブッシェルへ向かう動きとなった。

6月12日に米国農務省より発表された需給見通しにおいて、新穀2013/14年度産の期末在庫が前対比下方修正されたものの市場の予想を上回ったことで、相場はやや軟調に推移し、現在は645セント/ブッシェル付近で推移している。

6月9日時点の作付率は95%と、昨年同時期100%、ならびに過去5年平均98%と比べ下回っている。今後も生育状況に大きく影響するため、天候に左右される展開が予想される。

【とうもろこしシカゴ定期の推移 (7月限) セント/ブッシェル】



2. 大豆粕

(1) 米国大豆需給見通し

6月12日に米国農務省（USDA）より発表された米国産大豆の需給見通しは下記の通り。

旧穀 12/13 年度については、供給面では輸入が 5 百万ブッシェル増加した。需要面では輸出需要が 20 百万ブッシェル減少したが、米国内搾油需要が 25 百万ブッシェル増え、需要計は先月対比 5 百万ブッシェル増加している。米国内の期末在庫は、125 百万ブッシェル、在庫率 4.05%の見通しとなっている。

新穀 13/14 年度については、降雨の影響により作付遅延が発生しているが、需給共に前回対比据え置きとなっている。期末在庫は 265 百万ブッシェル、在庫率は 8.12%の見通し。

	穀物年度 発表日	大豆				
		11/12	12/13	12/13	13/14	13/14
		6/12	5/10	6/12	5/10	6/12
	作付面積	75.0	77.2	77.2	77.1	77.1
	収穫面積	73.8	76.1	76.1	76.2	76.2
	単位収量	41.9	39.6	39.6	44.5	44.5
供給	期首在庫	215	169	169	125	125
	生産量	3,094	3,015	3,015	3,390	3,390
	輸入	16	20	25	15	15
	計	3,325	3,204	3,209	3,530	3,530
需要	国内需要	1,794	1,730	1,755	1,815	1,815
	搾油	1,703	1,635	1,660	1,695	1,695
	種子・食用	90	90	90	87	87
	その他	1	5	5	33	33
	輸出	1,362	1,350	1,330	1,450	1,450
	計	3,155	3,080	3,085	3,264	3,264
	期末在庫	169	125	125	265	265
	在庫率	5.36	4.06	4.05	8.12	8.12

単位：面積（百万エーカー） 単位収量（ブッシェル/エーカー） 数量（百万BU） 在庫率（%）

(2) シカゴ大豆粕市場

5月後半以降のシカゴ相場は、米国内でのタイトな需給環境、堅調な輸出需要、コーンベルトでの降雨によるとうもろこし・大豆両産品での作付遅延を強材料に堅調に推移していた。直近では天候が回復傾向にあり一挙に作付が進むと考えられることから相場は頭打ちの感もあるが、タイトな需給環境から引き続き底堅く推移している。

今後については、6月12日米国農務省発表の需給見通しにて新穀大豆の需給には変化がなかったものの、旧穀の現物タイト状況を受けて底堅く推移することが見込まれている。

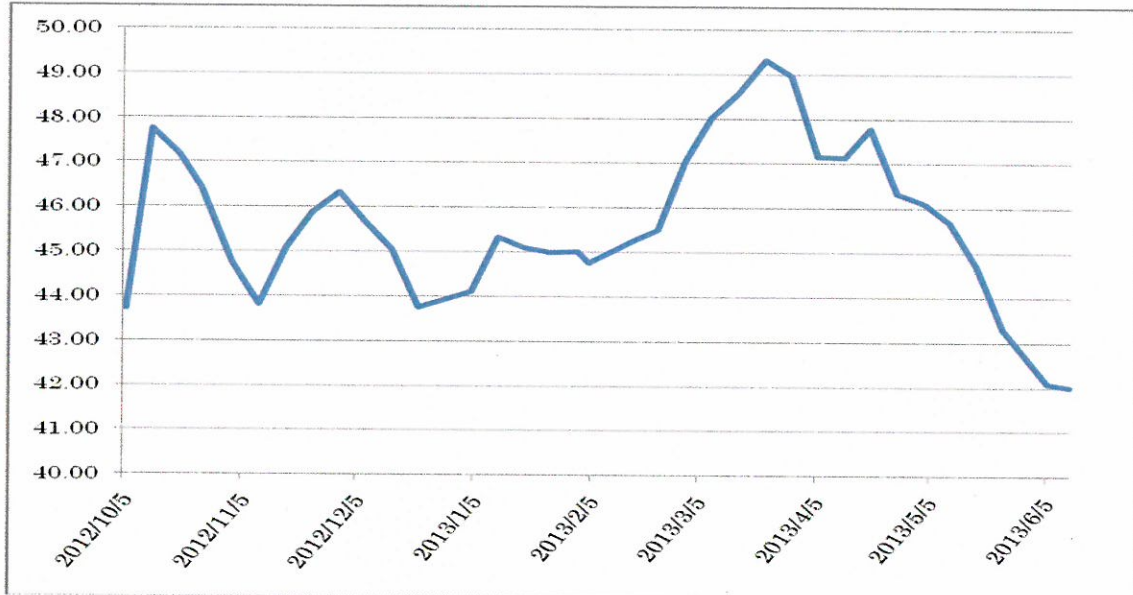
【大豆粕シカゴ定期の推移 (7月限) ドル/ショートトン】



3. 海上運賃

石炭や南米穀物など貨物の減少により船腹過剰感が出ていることから、海上運賃は軟調に推移している。7-8月までは船腹需給が緩和した状況は続くと思われる。現在の相場は42ドル/トン前後となっている。

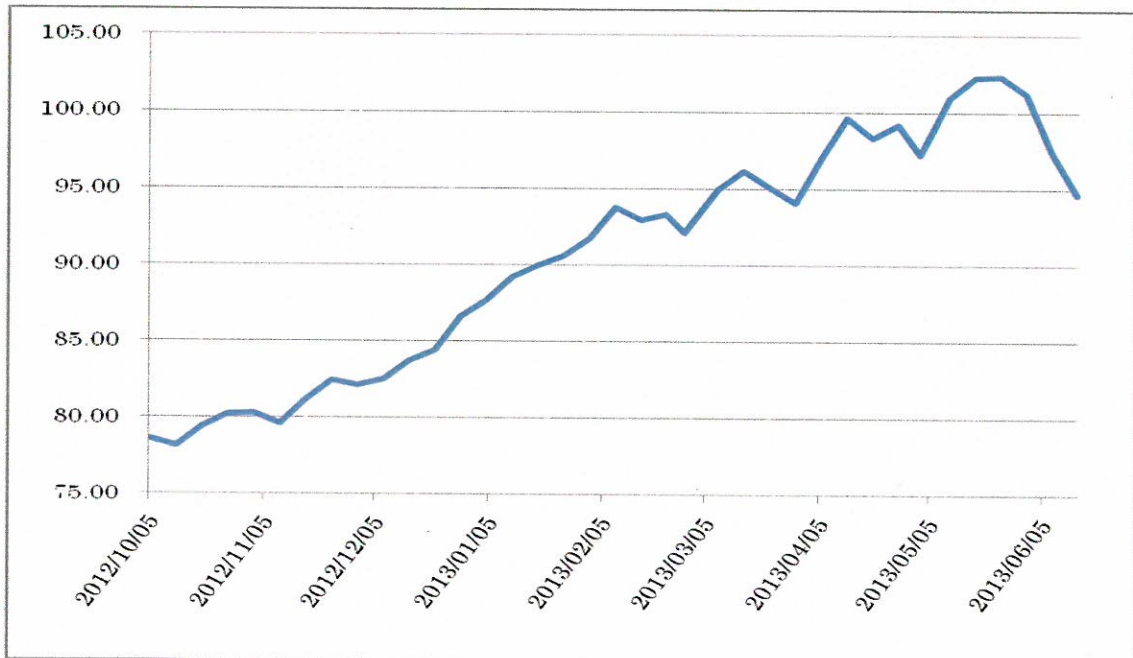
【米国ガルフ/日本 パナマックス型 海上運賃推移 (ドル/トン)】



4. 外国為替

5月に4年ぶりの100円/ドル台へ突入した為替相場だが、6月上旬に日経平均株価の下落によりリスク回避の円買いの流れが進み、再び90円/ドル台に戻した。その後も株式相場や米国雇用統計の発表等に神経質に反応して相場は乱高下し、現在は94円/ドル台となっている。

【ドル円チャート】



5. ふすま

農水省の発表によると、平成24年度の国内ふすま発生量は前年度対比97.8%、同年度の配混合飼料向けのふすまの需要量は前年度対比100.6%であった。供給量が減少する一方で需要量は増加したため、需給バランスはタイトになっていることが顕著に現れている。

直近では、6月20日からの小麦粉価格の値上げを前に仮需が起こり、ふすまの発生量が増加しているが、7月以降は値上げの影響で小麦粉の需要が落ち、ふすまの発生も減少する見込み。追加オーダーが困難になるなど受渡に支障が出る可能性がある。

6. 大麦

世界の生産動向

ア. 生産量：138,012千トン（前年比106%）

イ. 輸出量：18,265千トン（前年比98%）

ウ. 在庫率：15.7%

6月12日に発表されたUSDA需給見通しによると、2013/14年産の生産量は138,012千トン（前年比106%）、需要は136,522千トン（前年比103%）となり、生産量が需要を上回っていることから期末在庫は21,400千トン（前年比107%）へと増加する見通し。

2012/13年度の生産量はすでに確定しており、先月発表に対する大きな変動はなく、新穀の供給が始まるまでは、依然として供給に余剰感はない。

新穀の収穫が始まりつつある東欧・黒海地域では、少雨傾向にあるウクライナやロシアの一部地域に今後降雨があるかが引き続き注目視されているものの、現時点のコンディションは比較的良好と言える。

世界大麦需給統計(米国農務省6月12日発表)

単位:千トン

	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14		
					5月10日	6月12日	前年比
EU-27	62,149	53,511	51,826	54,372	55,304	55,584	102%
ロシア	17,881	8,350	16,938	13,952	17,500	17,500	125%
ウクライナ	11,833	8,484	9,098	6,935	7,000	7,000	101%
カナダ	9,528	7,627	7,892	8,010	8,550	8,550	107%
豪州	7,865	7,995	8,349	7,062	7,400	7,400	105%
US	4,949	3,925	3,392	4,796	4,790	4,790	100%
その他	36,647	32,715	36,923	34,789	37,338	37,188	107%
生産量計	150,852	122,607	134,418	129,916	137,882	138,012	106%
消費量計	144,978	135,819	135,731	132,841	136,572	136,522	103%
期末在庫	37,360	24,148	22,835	19,910	21,168	21,400	107%
在庫率	25.8%	17.8%	16.8%	15.0%	15.5%	15.7%	-

7. 小麦

世界の生産動向

6月12日に発表されたUSDA需給見通しによると、2013/14年産の生産量は695,856千トン（前年比106%）と先月発表に対し、5,243千トン下方修正されたものの、前年度の生産量に対しては増加する見通し。一方、需要については694,476千トン（前年比103%）と先月発表からほぼ変化なく、期末在庫は181,246千トン（前年比101%）、期末在庫率は26.1%の見通しとなっている。

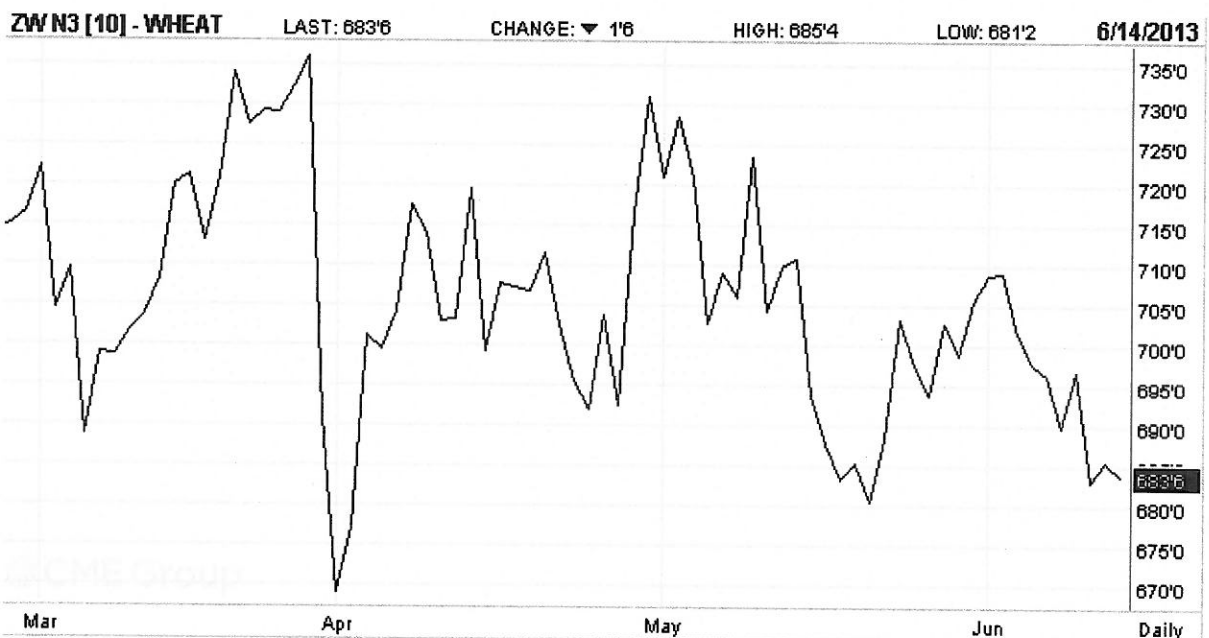
生産量見通しは今後の天候により大きく変動する可能性はあるが、昨年の干ばつの影響を受け減産となった黒海地域の新穀の作柄が良好であることが、世界の小麦生産量を押し上げる要因となっている。

世界小麦需給統計(米国農務省5月10日発表)

単位:千トン

	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	
						5月10日	前年比
EU-27	151,122	138,816	136,017	137,331	132,064	138,773	105%
ロシア	63,765	61,770	41,508	56,240	37,720	56,000	148%
ウクライナ	25,885	20,866	16,844	22,324	15,761	22,000	140%
US	68,016	60,366	60,062	54,413	61,755	55,976	91%
カナダ	28,619	26,950	23,300	25,288	27,200	29,000	107%
豪州	21,420	21,834	27,410	29,923	22,077	24,500	111%
その他	324,832	356,141	347,144	371,654	359,060	374,850	104%
生産量計	683,659	686,743	652,285	697,173	655,637	701,099	107%
消費量計	643,696	653,728	654,765	696,913	674,937	694,885	103%
期末在庫	168,673	201,688	199,208	199,468	180,168	186,382	103%
在庫率	26.2%	30.9%	30.4%	28.6%	26.7%	26.8%	-

【小麦シカゴ定期の推移(7月限) セント/ブッシェル】



8. ビートパルプ

(1) 米国産

米国の今年のビートの作付は、寒冷な気候のため遅れた。

作付面積も減少したため新穀の収穫量は減少見通し。収穫、製糖が例年より遅れ9月末ごろのスタートとなり、日本向けの新穀BPP船積みは11月末ごろにずれ込む可能性も出てきた。

(2) 中国産

中国ではビート生粕としての出荷も増えてきており、ペレットの流通量も幾分減少すると見込まれている。中国国内のBPPの需要も強く輸出向けBPPの数量、価格動向には引き続き注意が必要。

(3) チリ産

産地の降雨不足による土壌水分不足のため平年5万トン程度の日本への輸出が3万トンから3万5000トン程度に減少する可能性がでてきた。実際に新穀入船するのは今年7月末と予想される。産地の価格は、チリ国内でのBPPの需要が伸びており昨年対比強めで推移している。

9. 乾牧草

(1) アルファルファヘイ

＝ワシントン州・コロンビア盆地＝

1番刈りの収穫が開始されたものの、コロンビア盆地南部を中心として雨当たりが発生している。また依然として収穫を終えていない分についても、刈り遅れとなる可能性が高く、プレミアム品の収穫は難しい状況となっている。このため、2番刈り以降の品質に期待が寄せられている。

＝カリフォルニア州・インペリアルバレー＝

3番刈りの収穫が完了し、早い地域では4番刈りの収穫が始まっている。品質については蛋白が低い玉が主となっていることから、スタンダードグレードが主流となっているものの、PNW（太平洋北西沿岸地域）地区における1番刈りのアルファで雨濡れのダメージが発生していることから、インペリアルバレー地区における引き合いは強まっている。

(2) スーダングラス

早播きスーダンの収穫は例年並みのスケジュールで開始している。また品質については茶葉も少なく、良品が収穫されているものの、輸出向けの引合が弱いこともあり、産地での購買は積極的に行われていない。

一方、遅まきスーダンについては、休耕地プログラムの影響を大きく受ける可能性が高いため、遅まきスーダンの作付面積については今後も注視していく必要がある。

その休耕地プログラムについては、6月1日段階で前年対比630%（5,796エーカー⇒36,564エーカー）と激増している。

（3）ライグラスストロー／フェスクストロー

ライグラス、フェスクについては例年通りの生育状況となっており、良品の収穫が期待されている。

2012年産については、価格がかなり高騰したことを受け4月以降、日本と韓国向けの輸出数量は減少傾向となっている。夏場を迎える時期でもあるため、この傾向はしばらく続くと考えられる。

（4）USチモシー

早い地域では6月上旬より1番刈りの刈り取りが開始している。雨が降る予報は出ていないため、昨年とは違い、今年は良品の確保が期待される。

（5）カナダチモシー

天水地区において雨が一定量降ったため、懸念されていた早魃については解消に向かっているものの、気温が低いため収穫は1～2週間程度遅れる見通しとなっている。

（6）バミューダヘイ／バミューダストロー

バミューダヘイについては、1番刈りが完了し、2番刈りの収穫が始まっている。また、依然として種子価格が好調であることから、今年度産については、ストローの発生割合が増える見込みとなっている。

（7）クレイングラス

バミューダと同様、1番刈りが完了し、2番刈りの収穫が始まっている。1番刈りの品質については雑草の混入が多く見受けられているが、2番刈り以降は雑草の混入が少なくなると考えられる。産地価格については、作付面積が過去10年で最大になっていることもあり、軟化する見通しとなっている。

（8）豪州産オーツヘイ

新穀の播種については、各地域で5月末～6月上旬までには完了しており、西、南はそれなりに降雨に恵まれているが、東ではやや降雨が不足している。今後の降雨が期待されている。

（9）ヘイキューブ

PNW（太平洋北西沿岸）地区におけるヘイキューブについては、新穀の1番刈りが開始しているものの、通常2番刈り以降を原料として使用することから、産地情勢については今後の収穫状況次第となる。

一方PSW（太平洋南西沿岸）地区（主にユタ州）については、6月初旬より1番刈りの収穫が開始している。PSW地区のキューブは1番刈りから3番刈

りをそれぞれキューブ原料としているので、ヘイキューブの製造も順次開始されていくこととなる。

以上